

# 名目鈔の声点標示について

上野 和昭

【キーワード】 名目鈔 アクセント史 アクセント観 声点 声点標示

## 要旨

名目鈔は、その著作時において、声点は差されていなかった。

しかし、これが享受される過程（室町時代後期から江戸時代初期の頃）で、享受者によって徐々に差声語彙が増やされていったものであろうと考えられる。その声点によるアクセント標示体系を検討してみても、そこには、新旧両方式による標示が混然としていて、体系的統一性は必ずしも保たれてはいない。したがって、これをただ一樣なものとして考えることには躊躇される。このような声点標示の複層性は、たとえば後水尾院のような特定個人の差声に帰せられるものではない。先行する声点本からの移声や講説の聞書などをおして、十六世紀から十七世紀にかけての間に、多様な声点が徐々に集成されていった結果が、今日に残る声点本（「第三群」本）であると考える。

アクセント史の資料として注目されること久しいこの名目鈔が、いまなおその活用に一抹の不安を禁じえないのは、次の三つの理由によるものと思われる。

その一は、同書が有識故実関係の特殊語彙集であるので、そこに差された声点は固有名詞の特殊なアクセントを反映するのではないか、という疑問が常に付きまとうことである。その二には、諸本間の異同についての研究が少ないこと<sup>1)</sup>ため、声点本の成立過程について不明な点が多く、そこに反映するアクセントを何時の時代のものとするかについてすらもいまだ定説を見ないことが挙げられる。その三は、差声の方式が文字を単位とする古代アクセント観<sup>2)</sup>に必ずしも立っていないことである。同書に差された声点の実態は、これを遡る長慶天皇の「仙源抄」跋文のそれ<sup>3)</sup>とも、またこれより降る契沖の仮名遣書に見られるそれ<sup>4)</sup>とも少々異なるもので、その声点によるアクセント標示（以下「声点標示」と

よぶ、清濁は捨象して考える」の体系を明確にしなくては、アクセント史のうえに位置づけることもおぼつかない。

そこで、本稿では和語を中心に名目鈔の声点標示の体系について考察し、加えて声点本の成立事情についても言及しようとするものである。

なお、アクセントの高拍は●、低・下降拍はそれぞれ○●であらわす。また、名目鈔諸本の声点はへ内、その他の資料の声点はへ内、節博士・譜記の類はへ内に記す。

## 二

右に掲げた第一と第二の問題点について、はじめに私見を示しておく必要がある。まず、名目鈔が有識故実関係の特殊語彙集であることについてであるが、これは動かしがたい所与の条件である。ただし、固有名詞の特殊なアクセントかもしれないということ、一語一語のアクセントを検討する場合に生かす手だてが講じられれば、おのずと問題は解消する。

つぎに、東山御文庫蔵の著者洞院実照自筆本に声点が差されていないことが判明した。今となつては、もはやこれを著者自身のアクセントと解釈する根拠はなくなった。根上剛士（一九七六）は、声点本を「第二群」（主に漢字に濁声点のみを施したもの）本と「第三群」（字音語の場合は漢字に、和語の場合は傍訓の仮名に声点・濁声点を施したもの）本とに二分類して、「第三群」本の声点は、その淵源が「後水尾上皇の御説」にあると推定した。

そうであるとすれば、その反映するアクセントは室町時代末期から江戸時代初期の頃のものと考えなければならなくなる。

たしかに後水尾院の声点として移された声点本（陽明文庫蔵寛文十年本「近衛基熙」）は、その奥書（近衛基熙）によって移声の経緯も明確であるから、その意味ではもっとも信頼できる声点本ということとはできる。しかし、いわゆる「第三群」本にみられる声点の淵源とまで言い切るには残された問題も多い。この種の声点本には、ほかに内（関文庫蔵）尊（海識語本「あやう」・多和本「い」）（香川大学蔵）神原本「osi. 2」・群書類従本などがあり、みな基熙の奥書を載せてはいない。さらにその声点も、内尊本と陽明文庫本とを比較した場合、全体の約五パーセント程度は違っており、両者の前後関係を一概に決定することはできない。

そもそも名目鈔の著者自筆本に声点が差されていないということは、著者自身アクセントの違いまでを考慮していなかったことを意味する。諸処に記された注記（清濁・連声・短呼の指示など）にもアクセントに関する記述はない。しかし、このことがそのまま名目鈔の利用者にまで当てはまるものではなからう。転写または利用の際に、アクセントの注記が必要になることは十分考えられることである。むしろ、積極的に必要であったればこそ、「第二・第三群」本のような声点本が世に行われたと考えたい。所収語彙の性格からして、いかに公家といえども、これら六百余の語をすべて日常的に口頭に上せていたとは思えず、さればこそ、このような語彙集が編集される理由があったのであろうが、その流布・転写の間に、著者の配慮した意味・用法・清濁・連声などば

かりではなく、さらにアクセントの注記も加筆されていたのである。だから、その当初は声点も、注記者にとって必要な箇所だけに差されたはずで、差声項目の少ない「第二群」本の様子は、まさにその姿を伝えていいると考えられる。

それでは、なぜ「第三群」本のようにほぼ全ての項目に声点を差すような本があらわれたのであろうか。それはおそらく、十五・六世紀の頃は戦乱によって公家中心の朝政が思うに任せず、公家が地方に下ったり、また武家が朝政に参加する機会を得たり、といった本来の朝政の姿からすれば変則的な事態が生じ、それによって旧来の伝統が著しく損なわれたことに起因するものと思われる。問題の箇所だけに差声するようなやり方では、到底間に合わない程の必要性が生じたとすれば、それは本書を座右に置いて、その一つひとつのアクセントまでも習得・確認するということがあるから、このような世界が伝統性を失いかけていたと同時に、京都以外の地方出身者も公家らと交わり、教えを受ける機会が頻繁になったということも関係していると思う。

名目鈔のなかには、当時の普通名詞の京都アクセントを知っていれば、ことさらに差声しなくともよいものがある。たとえば「鬼」は雑物篇に筆名として掲げられた語であるが、この傍訓「ヲ二」に諸本みな「へ上平」と差声する。これなど京都人ならば、声点がなくてもこのように発音する以外に術はないものと考えられる。それなのに差声されているというのは、やはり本書の享受層が拡大したからであると解釈する。

もちろん、固有名詞のアクセントを注記する必要があるものも

含まれている。たとえば、禁中所々名篇に「小屋」があり、その傍訓「コヤ」に「へ上平」と差すのは多分これであらう。「小屋」は普通名詞ならば、古く袖中抄（鎌倉時代写部分）に「へ上」とあり、現代京都も●●であるから、二拍名詞第一類に属する語と思しき、ここに●○を思わせる声点があるのは不審である。しかし、諸本に異同がないので誤点とも考えづらく、それよりはむしろ、これが禁中所々の名の一つであることを重視して、そのような固有名詞のアクセントとして解釈するのが妥当であると思う。このように、第一の問題も名目鈔声点本の成立事情とともに考える姿勢が必要であらう。

それでは、名目鈔声点本はいったい何時頃のアクセントを反映しているのであろうか。根上（一九七六）のように「第三群」本の声点を後水尾院に帰せしめるとなれば、時代的には十六世紀末葉から十七世紀初頭と限定可能である。その可能性も全く否定することはできない。しかし、後水尾院以前にこのような声点が差されなかったか、となるとそうとも言えないように思う。声点本成立の事情は、右に祖述したような経緯を考えるべきであらうし、それならば後水尾院一人が差声したとみるよりは、その間に何人かの介在を想定すべきであらう。後述するように、声点標示体系から考えても、その複層性が指摘できるので、特定個人の差声と考えるのには同調しかねる。

さらに「第二群」本にも、漢字に濁声点が差されているばかりでなく、傍訓の仮名の一部に差声した例が見られる。たとえば、「第二群」本でも比較的古いものと思われる、宮内庁書陵部蔵の

延徳三（一四九一）年四條降量書写本（またはその転写本か）に  
は次のようなものがある。

真手結 マテツカ（へ上濁）ヒ

（恒例諸公事篇）

これら傍訓の仮名に声点を施そうとする試みは、根上も示唆する  
ように「第二群」本の声点のもとになった中院通秀（一四二八  
～九四）にまで遡るものと考えられるから、「第三群」本に見ら  
れる声点の温床は、すでにこの頃からあったのであろう。それが、  
十六世紀頃次第に成長して、最終的には後水尾院所持の声点な  
どへと連なったものと考えたい。

ともあれ、ここでは名目鈔「第三群」本の声点のあらわすアク  
セントを室町時代後期から江戸時代初期頃（十六世紀から十七世  
紀初頭を中心とした時代）に公家を中心とした社会に行われたも  
のと考えることにした。

### 三

名目鈔の声点標示体系を考察するに先立ち、まずその対象とす  
べき資料を確定しておきたい。一口に「第三群」本といっても、  
諸本間にはわずかながらも相違があって、どれをもって考察して  
よいかわからないからである。ここでは、陽明文庫蔵寛文七年本〔近380  
-28〕と寛文十年本（『陽明叢書』乙本以外的一本〔近380-22〕）と  
から後水尾院の声点を推定し、これと内尊本とを比較して両者同  
一の声点が差されている項目のみを取り上げる。ほかに群書類従  
本などが挙げられるが、声点の欠落などもあり、「第三群」本の

代表とするには右の二種が最適であると判断した。

また、名目鈔に差された声点は「へ上上去入」の四種で、「へ平輕」  
は無い。このうち「へ入」は字音語にわずかに差されるだけだから、  
ここで考察する和語には「へ上上去」三種の点のみがある。

そこでまず、二拍の和語について声点標示体系を考察する。<sup>100</sup>  
二拍の和語は当時、●●、●●○、○○●、○○○の四種類のアクセ  
ント型があったはずで、それぞれをいかなる声点標示をもってあら  
わしているかが問題となる。あらわれる声点標示とそれによって  
アクセントを標示されている語とを次に掲げる。

「へ上上」 上ぐ、刀自（とじ）、刀弥（とね）、鳥、箱、笛、札、

駅家（やけ）、小忌（をみ）

「へ上平」 鬼（筆名）、国栖（くず）、濃い、小屋、太刀、殿、

練り、蓋、札

「へ去上」 衣（きぬ）、園、母屋、夜居（よる）

「へ去平」 御（接頭語）

「へ平平」 出居（でる）

これを見てもまず気付くことは、アクセント型の数と声点標示の  
数とが一致しないことである。「へ上上」●●、「へ上平」●●○、「へ  
去上」○○、「へ去平」○○と推定してみても、「へ平平」が余分に  
なる。

「へ上上」を●●とすることについては、「上ぐ」が「一類動詞の  
終止連体形のアクセントを差声したものであるからこれでよく、  
「鳥・箱・笛・札」も、いわゆる「金田一語彙」<sup>101</sup>で第一類に属  
する。「刀自」も図書寮本允恭紀・袖中抄（へ上上）とあり（へ平曲

〔譜本〕(コ×)口説 現代京都●○ではあるが、「小忌」も浄弁本拾遺集「上上」とあって、多分第一類相当であろう。したがって、固有名詞の特殊なアクセントを考慮するまでもなく、「上上」は●●型を表すとみてよいであろう。

「上平」を●○とすることについては、「鬼・太刀」が「金田一語彙」で第三類、したがってこの時代○●○の変化を経ていたから、これでよいことになる。「鬼」は筆名でも、普通名詞と同じアクセントであったとみられる。「殿」もこれに準じて考えられる。「練り」も動詞「練る」が二類動詞であるから、その古い派生名詞アクセントは○●で、この時代●○に変化していた。「濃い」は「濃色コヒイロ」(衣服篇)から抽出したものながら、四拍語として考えた方がよい。「小屋・蓋・札」は普通名詞ならば第一類の語で、有識故実の特殊なアクセントが差されたものと考ええる。

「去上」は○●とみてよいであろう。「衣」は「金田一語彙」で第四類。「園」も前田本和名(類聚抄)・観智院本(類聚名義抄)(「平上」)であるから、これに準じて考えられる。「夜」は「夜御殿」から抽出したもので、そのもとは次のようにある。

夜御殿ヨシノヲト、へ去上平平平濁 (禁中所々名篇)

「おとど」のアクセントは消えて、「よるの」の「る」が撥音化した「よんの」のアクセントが生かされている。「夜」は古く○●と○●との区別をつけづらいが、平曲「夜ルに」(中上上)(指声)・「夜るは」(××上)(白声)、近松(浄瑠璃譜本)「夜ルは」(下上上)(現代京都は○●・○●両様)とあるところ

から少なくとも近世期には第四類相当であったことが知られる。「去平」は体系的観点から対応を考えれば、○●をあらわしてしかるべきであろうが、この差された語は接頭語の「御」のみである。「おん」は後統する語に連なっていく様子から、第四類相当と考えた方がよいものであろう。

「去」は差された拍の次に、少なくともその始まりの高い拍がくる場合に、直前の低拍をあらわすものと考えられる。(二)金田一春彦(一九五五 二五頁)は、これについて次のように述べる。

去声の点は第一音節にのみ現れ、しかもその場合は第二音節は必ず上声である。一方平声の点は第一音節には決して現れぬ。思うに、著者は、低い音節のうち第一音節のものを去声で示し、第二音節以下のものを平声で示したのにちがいない。

しかし、後統の声点が「平」の場合もある(以下の三拍語も参照)。

ところで、「平平」が「出居」に見られるのを、いかに解釈すべきであろうか。いま「去平」を○●をあらわすものと解釈するなら、この「平平」はいかなるアクセントに相当するのかを考えてみるに、同じ声点標示体系の中では落ち着く場所が無い。しかし、ここに文字単位のアクセント観に立っての差声(旧方式)が諸処にある伸原本(二)を見ると、左のようになっている。

出居 テキへ上平 (諸公事言説篇)

また「第二群」本の延徳三年本(前出)などにも次のようにある。

出居 テ中へ上濁○ (諸公事言説篇)

平声は平声輕をも含む概念であるとすれば、語のアクセントが全体として下降する型、すなわち●○であったとしてもなら不思議はない。また、●○ならば旧來の方式で差声すれば「へ上平」となって、神原本なども符合する。このようなことから、「へ上平」は●○をあらわしたものと解釈するのが妥当であろう。契沖の仮名遣書への連なりも、そう解釈してはじめて理解できる。二二

すると、●○を示すのには「へ上平」「へ上平」両様の声点標示があったということになり、声点標示体系を単純に一樣のものと考へることに躊躇させる。

四

次に、三拍の和語に施された声点から、その声点標示体系を考へる。まず、あらわれる声点標示と、それによってアクセントを標示されている語を掲げる。

へ上上上

黄端(きべり)、掣子(しずゑ)、尻付(しづけ)、白地(しろぢ)、鈴鹿(和琴名)、相撲(すまひ)、机(抜出(ぬきで)、庇、単衣、最手(ほつて)、申し、蒔絵、祭、御占(みうら)、御倉(みくら)、御厩(みまや)、節折(よをり)

へ上上平

采女、亀居(かめゐ)、小袖、定め、当麻(たいま)、直衣、并(接続詞)、花田、日陰、文殿(ふどの)、祭、輪無(わなし)

へ上平平 浅い(へ履)、冠(かぶり)、下(くだ)す、小庭、袴、火色

へ去上上 相(あこめ)、二藍(ふたえ)

へ去上平 忌火(いむひ)、二間(ふたま)

へ去平平 舍人

\* へ上上上 大殿(おとど)

へ上上平 野剣(のだち)

へ上平平 文夾(ふざし)

声点標示は、右のように九種類ある。三拍の和語のアクセント体系は、この時代●●、●●●、●●●●、●●●●●の五種から成るので、声点標示の方が明らかに余剰である。

へ上上上は、「相撲・机・庇」が、「金田一語彙」の「形」類●●●に当たる。「鈴鹿」は地名としては平曲に「へ上上上」(口説)。「御占」も同じく「へ上上上」(白声)。また、「御厩」は古く観智院本・鎮国守国神社本名義に「へ上上上」とある。おそらく、この時代も●●●型のアクセントであったろう。ところが、「単衣」は、図書寮本名義「へ上上上(東か)」、観智院本名義「へ上上上」などとなり、室町以降は●○○と推定される(現代京都は●○○)。「蒔絵」も名目鈔では助詞「の」が低く連なる形であらわれるから、あるいは「蒔絵」の○○○○●●●○○という変化を経たものかも知れない。そうであれば、単独なら近松「へ上上上」とあるように、室町以降●○○となって別段不思議はない。

してみると、「蒔絵」はここから除外できる。ともあれ、二拍和語の場合をも勘案して、名目鈔の「へ上上上」は●●●をあらわし

たものと解釈してよいと思う。

「上上平」は、●●○を示したものと考える。「采女」は古今集声点本諸本・袖中抄（鎌倉）《上上平》、「小袖」も平曲（上××）（口説・白声とも）ながら近松には（上上下下）も見られる。「定め」は二類動詞の派生名詞形であるから、○○○●●○○の変化を想定すべきで、補忘記（徴徴角）とあるのは変化後のアクセントを反映する。「直衣」は図書寮本・観智院本名義など《平平平》とあり、平曲（上××）（白声）（コ××）（口説）とあるから、これも○○○●●○○○の変化が考えられ、その途中のアクセントを名目鈔が反映したと解しうる。「花田（纏）」も図書寮本・観智院本名義や袖中抄（鎌倉）に《平平平（濁）》とある。「井」は「並ぶ」の連用形アクセントが生きているであろうから●●○○でよい。

こうしてみると、《上上平》は●●○○を示しているとみるのが適当であろう。「冠」は袖中抄（鎌倉）《平平平》とあって、○○○●●○○○の変化後の形か。「袴」は、いわゆる「頭」類の語で、「冠」と同様の変化を経た。「小庭」も平曲（上××）（白声）、近松（上××）などとあって名目鈔と一致する。「浅し」は二類形容詞であるが、これは「浅履」と熟して特殊語になった関係で、本来のアクセントを崩したものと考えられる。「下す」も、一類動詞ながら左のようであるのは、特殊語のアクセントとして変容したものであろうか。

勘下カンカヘクタス《上上平濁平平平濁平》（諸公事言説篇）  
《去上上》は、○●●を標示したものとみる。「相」は図書寮

本名義や字鏡で《平上上》とあるから、古くからこの型だったものと思われる。

《去上平》は、「忌火・二間」ともに当時のアクセントを推定したいが、声点標示の体系性からは○●○をあらわすとみるのが妥当であろう。神原本では、「二間」に《上上平》の声点がある。

それでは《去上平》はどうか。これも○●○とみるのがよろう。語頭の《去》は次に高拍がくる場合の直前の低拍をあらわすから、第一・二拍は○●であらうし、二拍語で《去上平》を○●とまた《上平》を○●と推定可能なことから、○●○をあらわしたとみるのが妥当である。「舎人」は前田本雄略紀・観智院本名義・袖中抄に《平平平》とあって、古くは○○○であったと考えられるが、室町以降●●○○○のごとき変化を経た模様で、平曲に（×上×）（口説・白声）などとなり、神原本も旧方式で《上上平》と差声する。

《上上上》は御水尾院の声点にも内尊本にも出てこず、増補系の内（関文庫蔵）浅（草文庫）本、静（嘉堂文庫）松（井）本にのみ見られるものである。

ヨンノヲト、《去上平平平平濁》 後水尾院声点・内尊本  
《去上平平上上濁》 内浅本・静松本

（禁中所々名篇）

「大殿（御殿）」は、平曲では（×上×）（白声）（×コ×）（口説）などと○●○を反映する。ここは第二・三拍に《上上上》と声点があるのだから、○●○と解釈するよりほかにあるまい。

五

[illegible]

「へ去上」「へ去上上」「へ去上上上」は、上昇調のアクセントをあらわす。名目鈔の声点の時代には、いわゆる「選上がり」の変化はまだ起こっていなかったもので、いずれも第一拍は低拍で第二拍から高拍になる。これを第一拍の文字に「へ去」を差してあらわす。



わしているのであるから、語全体（少なくとも文字連結）を考慮した差声方式といえる。増補系声点本にある「平上上」は旧来の方式。

「へ去平」は、契沖の仮名遣書では○●をあらわす。このこもそう解釈してよいであろう。したがって、三拍の「へ去平平」は○●○となるが、この場合二拍目の「へ平」は平声輕の意と解釈可能である。すなわち、名目鈔では（旧方式によるものは別）語頭または「へ去」の直後に「へ平」があれば、それは平声輕を意図したものである。ところが「へ去」の直後という制約は、時に不徹底になりやすかったとみえて、これを「へ去上平」にしたところもある。

「へ平上平」は旧方式。

そもそも語全体のアクセントを考慮して差声する方式は、南北朝時代のアクセント体系変化後でなければ、少なくとも和語の場合には実用に適さないはずのものであった。なぜなら、それ以前には語頭に低拍が二つ以上並ぶことが許され、それによって多拍語の場合はとくに語全体としての上昇（起伏）調アクセントが多種にわたるといふ状態であった。下降調にも上昇（起伏）調にも多種のアクセント型があり、さらに低平調までもあるのに、これを平・上・去という三種類に捕らえようとするのは、観念的には可能であっても、実際の差声という段階では現実的なものではない。

それが実際の差声に反映してくるのは、語頭の上昇調が○●以外になくなった室町時代以後のことである。語頭の上昇調を「へ去」を用いてあらわしても、その内容が○●以外になくなり、

そしてまた低平調もなくなり、「へ平」が少なくとも語頭において語全体の下降調のみをあらわせるようになってはじめて可能になったのである。それでも問題は残る。それが、多拍語の下降調アクセントの標示と起伏調アクセントの下降位置の標示に関する問題である。

名目鈔の声点標示は、それらの問題を新旧両方式の差声によって解決しようとしたものと思われる。下降調は語頭から「へ上」を用いて、主に旧方式により、上昇調は語頭に「へ去」を置く点で新方式を採りつつも、語中で下降する場合には原則として旧方式によっている。「へ去平平」「へ去上平」と両様の標示が見られるのは、この間の複雑な事情をよく反映していると思う。名目鈔の声点標示は、これを全体としてみれば、両アクセント観の狭間にあって、アクセント記述の実際処理のために工夫されつつあったものと考えられる。

ところで、名目鈔における声点標示の、このような混然とした状況を、その声点本の成立という観点からはどうとらえればよいであろうか。

仮に名目鈔の声点が特定個人によって差されたものとすれば、●○など頭高型のアクセントを「へ上平」「へ平平」など二様に標示するのは、声点標示原則の揺れであり、方針が不徹底であることの反映である。まして○●を「へ去平平」「へ去上平」「へ上上平」などと三種に標示することなどはその極みといえよう。名目鈔のような特殊語彙集に差声する場合は、当然普通名詞との違いなどにも配慮した、繊細なアクセント感覚が備わってはじめて可能な

ことで、そのような差声者が声点標示に揺れをみせるとは、いかにアクセント観が変化しつつあった時代とはいえ、理解に苦しむところである。とすれば、ここは声点本からの移声や講説の聞書など、もっと複雑な経緯を想定すべきなのであって、多くの人々の関与が当然考えられなければならない。

名目鈔声点本、とくにその「第三群」本成立の背景については、第二節に概略述べたが、本稿に指摘した声点標示体系の複層性から、次のように推定して誤らないと思う。すなわち、本書の声点はある特定個人にのみ帰せられるものではなく、少なくとも数種類の試行的差声が、十六世紀から十七世紀にかけて行われた、その集成された結果であらう、と。

注(一) 金田一春彦(一九四三・一九五三・一九五五) など

(2) 根上剛士(一九七六) が唯一この問題に取り組んでいる。

(3) 前田富祺(一九六六)

(4) 望月郁子(一九七三)

(5) 金田一(一九四三) 前田(一九六二) 坂本清恵(一九九二)

(6) 根上(一九七六) で推定、上野和昭(一九九二b) で写真確認。

(7) 上野(一九九二b)

(8) 一拍の和語は「屋御座」から抽出可能な「日」(「ピノ」へ上平)と、「裳」へ上だけについてしかわからないので、いま考察から省く。

(9) 金田一(一九七四) 六二〜七三頁

(10) 秋永一枝(一九九一)に「古今和歌集聞書」の去声点について「屢々ある去声点は、平安・院政期の差声法とは異なり、へ上平へと上昇してゆく語彙のへ上への部分に差されることが多い」とある。(五四三頁)

(11) 上野(一九九二a)

(12) 契沖の仮名遣書については、注(9)参照。名目鈔のへ上平の声点標示は、その「第三群」本において神原本以外異同はなく、誤点とも考えづらい。

(13) この種のアクセント標示に関する契沖の工夫については、坂本(一九九二)に詳しい。

(14) 金田一(一九五五) 一三三頁

(15) 金田一(一九四三) 八八頁

# 【参考文献】

秋永 一枝(一九九一) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』 校倉書房

倉書房

金田一春彦(一九四三) 『契沖の仮名遣書所載の国語アクセント』

『国語と国文学』二〇一四

(一九五三) 『国語アクセント史の研究が何に役立つか』

『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂

(一九五五)

『古代アクセントから近代アクセントへ』

『国語学』二二

(一九七四) 『国語アクセントの史的研究原理と方法』

搞書房

坂本 清恵（一九九二）

「契沖の四声注記を再考する」『国語学会平成4年度春季大会要旨』

根上 剛士（一九七六）

「名目抄声点本考」『国語学』一〇四

前田 富祺（一九六二）

「契沖のアクセント観」『文芸研究』四〇

（一九六六）

「古代における国語アクセント観」『国語学研究』六

望月 郁子（一九七三）

「『仙源抄』跋文の語調標示の方法とその発想」『常葉女子短期大学紀要』五

上野 和昭（一九九二）

「アクセント資料としての神原文庫本「名目抄」について」辻村敏樹教授古稀記念『日本語史の諸問題』明治書院

（一九九二）

「名目鈔諸本の系統について」『国語学研究と資料』一六

なお、引用した資料の準拠した文献（原本の場合は所蔵者函架番号）は以下のとおり。

日本書紀 石塚晴通「図書寮本日本書紀永治二年頃点」（本文篇）  
『北海道大学文学部紀要』二七一、同「前田本日本書紀院政期点」（本文篇補）  
『北海道大学文学部紀要』二五一二／和名類聚抄 馬淵和夫「和名類聚抄古写本声点本文および索引」風間書房／類聚名義抄「図書寮本類聚名義抄」勉誠社・天理図書館善本叢書33-34「類聚名義抄観智院本」・「鎮国守国神社本三寶類聚名義抄」勉誠社／字鏡 古辞書音義集成6「字鏡（世尊寺本）」

汲古書院／古今和歌集声点本 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 索引篇』／袖中抄 秋永一枝・後藤祥子『袖中抄声点付語彙索引』ア（クセント）史（資料）索引六／浄弁本拾遺和歌集 秋永一枝『顕昭拾遺抄注・浄弁本拾遺和歌集声点付語彙索引』ア史索引十一／補忘記 元禄版 金井英雄『補忘記 語彙篇 博士付和語索引』ア史索引九／平曲譜本 『平家正節』東京大学国語研究室蔵 [31198]／近松浄瑠璃譜本 坂本清恵『近松世話物浄瑠璃胡麻章付語彙索引体言篇』ア史索引五／現代京都 『日本国語大辞典』「京ア」の項（榎垣実）・中井幸比古『現代京都方言のアクセント資料』（一）